

創作絵本を通した多面的考察

～「子どもに伝える敬天愛人 心があたたまるメルヘン大賞」

作品の分析および効果を探る～

大野 雄子・久保木 健夫・鈴木 健一

A multidimensional consideration on creative works of children's book
— A research for analysis and effect of works from a children's book competition —

Yuko OHNO Takeo KUBOKI Kenichi SUZUKI

キーワード：ことば 表現「造形」 絵本 発達心理

I はじめに

「子どもに伝える敬天愛人～心があたたまるメルヘン大賞」は、平成 27 年度研究プロジェクト補助金を受け、筆者らによって立案、実施された。本プロジェクトは、子どもに「敬天愛人」の精神をわかりやすく、心があたたまる童話や絵本として伝えることを目的に、童話部門、絵本部門を設け平成 27 年 5 月～9 月に本学学生、卒業生、一般から公募を行った。選考については、選考委員会を組織し、それぞれの部門から大賞を 1 名ずつ選出した。

選出された作品は、童話部門が『やさいキライなたあくと三毛猫のミケ』、絵本部門が『ゆきだるまとねこのおじょうさん』である。

大賞作品は、印刷・製本され、本学の附属幼稚園年長児クラス、実習協力幼稚園及び保育所に配付した。

本稿は選出された作品について、鈴木による絵本と子どもの言語活動と言語からの視点、久保木による造形的観点、大野による心理的観点から絵本を介した親子のふれあいについて多面的に考察したものである。

II 言語活動・言語の面から

1 物語として

(1) テーマ

学生たちが口にする「心がほっこりする」作品として成り立つためには、作品のテーマが、「穏やかなものや和まされるもの」であることが大事であると言える。

絵本部門の大賞作品の『ゆきだるまとねこのおじょうさん』は、雪だるまが子猫の窮地を救うという話であり、「問題を解決するために行動する優しさ」がある。

童話部門の大賞作品の『やさいキライなたあくと三毛猫のミケ』は、飼い猫が一工夫して主人公の野菜嫌いを改善するという話で、「成長を手助けする優しさ」がある。

この 2 作品には共に「優しさ」が根底にあると言える。自分の都合によるものではなく、相手のことを真剣に思いやる優しさによって、「問題解決」ができたり、「成長」につながったりしているのである。これらのことは、子どもたちの共感を呼び、困っている人を助けようという思いやりの心や、自分も頑張っ

みようという向上心を育てる一助となるものと思われる。

(2) 登場人物の設定

作品の登場人物もまた重要な要素である。どのような人物が好まれるであろうか。

子どもたちに受け入れられやすい登場人物、特に主人公の条件としては、

①子どもたちがよく知っている

②親しみが持てる

存在であることが重要である。

また、その姿は、どちらかという

③丸みを帯びている

と安心して受け入れられる。

さらに、読み手や聞き手である子どもたちと同じように

④人間の言葉を話す

ということも挙げられる。

これらの点から、前述の2作品を見てみると、『ゆきだるまとねこのおじょうさん』の登場人物は、雪だるまと子猫である。一方『やさいキライなたあくんと三毛猫のミケ』の主な登場人物は、猫と幼児である。いずれも子どもによく知られており好感を持たれている。雪だるまも猫もその体型は丸みを帯びており、たあくんは自分たちを重ね合わせることできる年頃である。そして、皆人間の言葉を話している。

したがって、両作品の登場人物は、先の条件を満たしている人物であると言える。

(3) 展開と結末

お話の展開として重要なことは、動きや変化が表現されていることである。主人公やその周辺の人物の

「行動がたどられている」

ことが、お話の中で自分たちも一緒に想像の世界に生きていく楽しさにつながっていく。

また、結末は、筆者の印象に過ぎないが、

「ハッピーエンド」

のものが多く感じられる。そうでないもの、例えば、子どもたちが怖さや悲しみを感じたり、この先が心配になったりするものもないわけではない。しかし、子どもたちにもっと読みたいという気持ちを抱かせたり、想像力を広げて活動に生かさせたりするには、困ったことがうまく解決できたり、分からなかったことが分かったりという結末が有効になるであろう。

(4) 長さ

お話としての長さも重要である。

「長すぎ短すぎない」

ほどよい長さの作品であることが、子どもたちが楽しく作品世界に浸れる条件になる。

『ゆきだるまとねこのおじょうさん』は見開きで12場面24ページの作品である。うち11場面に言葉が入っている。年中・年長の子どもの一人読みが可能な長さであると言える。『やさいキライなたあくんと三毛猫のミケ』は童話であるから、言葉中心になるが、12ページの作品である。絵本に比べて文字が多いので長さを感じてしまうかもしれないが、挿絵が入って手助けをしていることもあり、最後まで読んだり聞いたりできる作品であろう。

2 言葉遣いの面から

(1) 用語

子どもたちの読むものであるから、そこに

用いられる言葉は、

① 易しい言葉

であることが肝要である。子どもたちの生活語彙に入っていない言葉は、理解の困難な言葉であり、避けたほうが良い。例えば、『ゆきだるまとねこのおじょうさん』では、最初の案から完成版になる間に、次のような対応がなされている。

「たいそう立派な」→「とてもりっぱな」

「準備は万端」→ 削除

また、情景や様子を生き生きと表すためには、説明の言葉だけではなく、

② 擬声語や擬態語

が有効になる。『ゆきだるまとねこのおじょうさん』では、例えば、雪道を歩く雪だるまの足音が「どしどし」、ねこが歩く音は「きゅっきゅっ」と表現されている。子どもたちが声を合わせて「どしどし」「きゅっきゅっ」と言っている様子が目に浮かぶようである。

(2) 文

子ども向けの読み物であるかどうかに限らず、文は一般的に

① 短く

表現したい。

金田一春彦氏は「日本語で長いセンテンスを書くと、最初の題目なり主語なりを受ける述語動詞ははるかうしろにいく。そうしてその間にたくさんの小さいセンテンスの卵のようなものが割って入る形になる。これでは聞く人、読む人は、話の中心思想が分からないではなはだ苦しむ。われわれの日本語では、つとめて短いセンテンスで文章を書かなければならない¹⁾。」と言っている。

『ゆきだるまとねこのおじょうさん』を例に、文の長さを見てみよう。見開きごとに文の数とその中で最も長い文の文節数と音数を整理すると次のようになる。

見開き	文の数	もっとも長い文	
		文節数	音数
1	2	9	41
2	2	7	30
3	4	15	65
4	10	7	35
5	11	7	33
6	4	5	25
7	4	8	36
8	6	11	46
9	8	17	63
10	6	8	38
11	4	8	35
12	0	—	—

本稿を例にして考えると、1行には20字入るので、長いものだと3行分を少し越えることになるが、多くの行は2行以下の文である。意味を理解する上で混乱するような長さの文ではない。作品中もっとも長い文は、見開き3(5,6ページ)にある「ゆきだるまが、おおきなあしおとをたてながら、しばらくあるいていると、あたりをきよろきよろとみまわしている、ちいさなねこのおじょうさんが、みえました」である。文中に主述の不照応やねじれがあるわけではなく、意味も理解できるが、「ゆきだるまは、おおきなあしおとをたてながら、しばらくあるいていきました」「すると、あたりをきよろきよろとみまわしているねこのおじょうさんが、みえました」と二つの文にしたほうが分かりやすくなったかもしれない。

また、子どもたちが好む表現の一つに繰り返しがあ。その部分では読み手に合わせて

楽しそうに声にしたりすることがある。したがって、文のもう一つのポイントは、

② 繰り返し

である。

『ゆきだるまとねこのおじょうさん』では、雪だるまの歩く足音「どしどし」が繰り返される。これにねこのおじょうさんの足音「きゅっ」が合わさり「どしどし、どしどし、きゅっ、きゅっ」という表現になって繰り返される。『やさしいクライなたあくんと三毛猫のミケ』でもミケの言葉をまねて「おいしくなあれ、おいしくなあれ」と繰り返す表現がある。

これらは、読み聞かせの場面では、一緒に声に出したり、書かれていない所でも、効果音として繰り返したりもできそうな表現である。

(3) 絵本ならではの

文章のみの作品と違って絵本には絵がついている。むしろ主たるものは絵である。したがって、絵から想像できることはなるべく言葉にしないようにしたい。言わば、

「絵に語らせる」

のである。

例えば『ゆきだるまとねこのおじょうさん』の7、8ページの絵に付ける文章を、最初の案と最終のものとを比較してみよう。

<最初の案>

「ねこのお嬢さん、一体どうしたんだい？何かお困りかい？」とねこのお嬢さんに聞きました。ねこのお嬢さんは、ゆきだるまに初めて気が付いて、びっくりしました。

困った顔をしているねこのお嬢さんにゆきだるまはもう一度優しくききました。

「僕が手伝えることはないかい？」

ねこのお嬢さんは小さな声で言いました。

「おうちがわからなくなってしまったの」

「それは大変だ。ねこのお嬢さん、僕が君のおうちを探すのを手伝ってあげましょう」とゆきだるまは言いました。

ゆきだるまは、ねこのお嬢さんのおうちを探すのを手伝うことにしました。

<完成版>

「ねこのおじょうさん、いったいどうしたんだい。なにかおこまりかい」と、ゆきだるまは、ききました。

ねこのおじょうさんは、ゆきだるまにはじめてきがついて、びっくりしました。

ゆきだるまは、もういちどやさしくききました。

「ほくがてつだえることはないかい」

ねこのおじょうさんは、ちいさなこえで言いました。

「おうちがわからなくなってしまったの」

「それは、たいへんだ」

ゆきだるまはねこのおじょうさんのおうちをさがすのをてつだうことにしました。

最初の案にあったのに完成版でなくなっているのは、まず「困った顔をしているねこのお嬢さんに」という表現である。ねこのお嬢さんの困った表情は、絵に見事に描かれている。そこで、この表現は省略し、絵に任せていると考えられる。

また、この場面の会話は、絵に描かれているねこのおじょうさんとの間の会話だけである。したがって、会話主がゆきだるまで受け手がねこのおじょうさんという主客が変わらない場面では、相手が描かれていることもあ



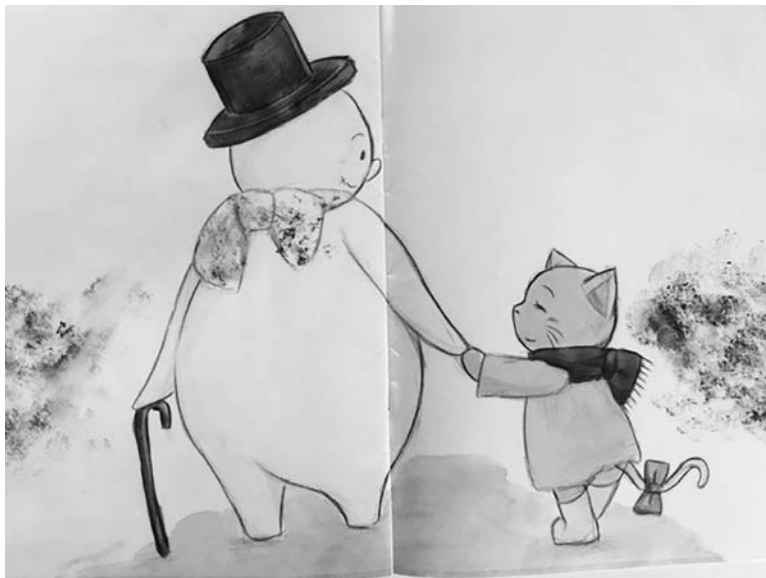
『ゆきだるまとねこのおじょうさん』7,8 ページ

て、「ねこのお嬢さん」という表現の省略が行われている。

次は、最後の場面（23,24 ページ）である。

最後の場面には言葉が書かれていない。絵のみのページである。言葉がなくても、ゆき

だるまとねこのおじょうさんののにこやかな表情から、二人の満ち足りた気持ちが十分に伝わってくる。読み手や聞き手が、作品の温かな雰囲気に入ることができ、お話の余韻を味わえる場面になっている。



『ゆきだるまとねこのおじょうさん』23,24 ページ

3 まとめにかえて

大賞受賞作品を、子どもたちの言語活動や言語そのものの視点から考察してきた。その結果、子どもたちの心を育てる絵本や童話として、次のようなことが大事であるということが確認できた。

- [テーマ]
- ・穏やかなものや和まされるもの
- [登場人物]
- ・子どもたちがよく知っている
- ・親しみが持てる
- ・丸みを帯びている
- ・人間の言葉を話す
- [展開]
- ・行動がたどられている
- [結末]
- ・ハッピーエンド
- [長さ]
- ・長すぎず短すぎない
- [用語]
- ・易しい言葉
- ・擬声語や擬態語の使用
- [文]
- ・短く
- ・繰り返しの表現を入れる
- [絵本ならではの]
- ・絵に語らせる

Ⅲ 美しさを感じる感性と造形的な観点

今回、本プロジェクトに参加して、大賞作品を保育・教育関係者に配布したところ、関係者の反応は予想以上に良かった。教育機関

による公募であるということと、高校生による作品が含まれていたこと、教育と研究活動を含めて目的を設定したこと等が、結果的には好意的に受け止めていただけた、という印象を受けている。絵本や童話の愛好者が非常に多いことも改めて認識した。こうした活動を、教育という点から安心・安全な形で運営し、参加する機会と場を作り出す試みを実現できたことが、本プロジェクトの大きな成果だと考えられる。この章では、大賞作品を元に造形的な観点から考察する。

1 本章の目的と大賞作品の造形性

今回の大賞作品は、主に高校生や大学生が有志で製作した作品である。そのため、本章では、作者や読者が今後も絵本や童話を愉しみ、親しむために有益と考えられる造形的な観点について考察することを目的とする。

(1) 絵本『ゆきだるまとねこのおじょうさん』

本学の学生が製作した作品である。作品からは、安定した描写力が見て取れる。繊細な感受性と美術的な能力に秀でた一面を持ち合わせている。登場人物を眺める画面上の視点は、様々な角度から捉える複雑な構図が試みられ、工夫が施されている。絵画表現だけでなく、物語も作者が一人で製作を手がけている。冬の季節を場面を設定しているが、作品から受ける印象は暖かく穏やかで、清潔感に溢れている。

(2) 童話『やさしいキライなたあくんと三毛猫のミケ』

高校生による創作作品である。童話作品であるため、本来は必ずしも絵を必要とする訳ではないが、作品のイメージにあわせて、数カ所にイラストが挿入されている。躊躇することなく、様々なイメージが伸び伸びと表現されており、一種の眩しさを感じさせる。文章だけでも十分に映像を想起させる表現力を備えている。造形的な能力とは、単に素材を通して目に見える形で表現することだけを指し示している訳ではなく、こうした童話作品のように、作者や読者の想像力の中で、豊かな視覚的イメージを想起させる力のことを指し示しているのだろう。

2 絵本と造形性

(1) 絵本の表現構造と絵本の愉しみ

絵本の造形性に関する現代の絵本研究には、まず絵本研究者・中川素子による絵本の視覚表現に関する研究があげられる。中川は絵本学研究を推進してきた中心的な人物の一人である。また、国語や児童文学、保育や児童文化等の分野で研究されることの多かった従来の絵本研究の中で、造形的・美術的な観点から絵本研究を行った絵本学研究の第一人者でもある。

中川によると、絵本の表現構造は、表紙、見返し、扉、小口、天地、のど、帯、本文部の画面から成り立っている。このうち絵本の表紙について、中川は次のように述べている。

書店や図書館の陳列室に並ぶ絵本は、まるで通りに並ぶ家々のようだ。入口を見て私たちは、どんな家だろうか、どん

な家族が住んでいるのだろうかと思像する。ノックした時、笑顔が迎えてくれるだろうか、それとも魔法使いのおばあさんが出てくるだろうか。入口の雰囲気だけで、その家の間取りや住んでいる人の性格までわかってしまうのが不思議だ。

絵本の表紙は、そこを開けなければ中へ入ることができない入口と考えられる²⁾。

中川はこのように絵本の魅力を楽しく紹介している。これから始まる絵本の世界に、わくわくドキドキする様子が伝わってくるようである。

(2) 絵本のしくみと造形的観点

これまで、絵本の造形性に関する研究は数多くの研究がなされてきている。そのどれもが貴重な研究としてあげられるが、次に本稿では、絵本研究者・藤本朝巳による絵本のしくみに関する研究を基に絵本の造形性について考えてみたい。

藤本は『子どもと絵本』の中で、絵本の「色」「形」「線」について考察している。

(2)-1 絵本の「色」

周知のように、色には赤、オレンジ、黄のような暖色と、青系統の色のような寒色がある。また、赤や黄は前のほうに飛び出してくる色であり、青や紺色は奥のほうに遠ざかっていく色でもある。清潔でさわやかに感じる色や、見た瞬間にドキッとさせる色、ショックを感じさせる色、安心する色、不安を感じさせる色等、色には様々な効果を感じさせる働きがある。藤本によると、このように私たちがいる色に

対して同じ感じ方をするのは、その色に対して文化的にある共通の感覚を持っているからである。あるいは、その色の組み合わせに対して、独特の連想をするからでもある。絵本作家は、そのような感覚に訴え、色やその組み合わせに対して感じる印象を上手に使用して、絵本の情報を伝達している。

(2)-2 絵本の「形」

基本的に絵は形と色で成り立っている。形は絵の印象に大きな影響を与えるが、形について一言で端的に述べることは難しい。その形について藤本は、比率で絵を描き分ける描写法に着目して、絵本画家・ディック・ブルーナの作品に登場する登場者・うさこちゃん(ミッフィー)を例にあげて考察を行っている。

ブルーナは、大人の登場者と子どもの登場者を描き分ける際に、大人の顔(頭)の形はやや縦長の楕円形で、子どもはほぼ円形に近い形態で描いている。目の位置は、大人の場合は顔の中央に描かれており、子どもの場合は顔の中央より少し下の位置に描かれている。頭の大きさと身体の長さの比率についても、大人の頭と身体は、一對二くらいの割合だが、子どもの頭と身体は、一對一くらいの割合である。大人と子どもの描写の違いを、大きさの違いで描き分けるだけではなく、各部位の比率の違いによっても描き分けているのである。

さらに藤本は、感情表現を絵で表す点に着目している。感情表現や喜怒哀楽を絵で表現することは、絵本の絵の表現では特に重要である。絵本の絵は、物語(文)と複合的に働

きあって絵を描くという特徴を持っているからである。感情表現や喜怒哀楽は、目や口を開けたり閉じたり、涙をはっきり描いたりするという直接的な方法がある。その他、モーリス・センダックによる絵本『かいじゅうたちのいるところ』という作品例のように、主人公マックスの着ているオオカミ・パジャマの耳がぴんと立った状態の時は、荒れた心の状態を表しており、オオカミ・パジャマのフードが頭部から外されて耳が萎れたように描かれている時は、心が穏やかになった状態を表している、というような絵による表現の工夫が施されている場合もある。

(2)-3 絵本の「線」

絵で描く線には、フリーハンドの線、定規で引いた線、コンピュータで描いた線等がある。また、漫画でよく用いられる動きを表す「スピード線」や「動く線」もある。逆に静止画のように表現することで、瞬間的に時間が切り取られたような印象を与える表現もある。絵本の線には多様な表現が存在する。藤本は、絵本や漫画では、こうした動きを絵で表現することが表現上の一つの課題となっていることを指摘している。

3 絵本と童話製作における作品のチェックポイント

絵本『ねずみくんのチョコッキ』は、人気シリーズの作品として、日本では特によく知られている。作者は、なかえよしを(作)と上野紀子(絵)である。二人は絵本製作に伴い、プロを目指す絵本作家志望者に向けて絵本づく

りの入門書『絵本と童話の作り方』を著している。同書には、絵本や童話を作る時のポイントが、実際に製作に携わるプロの作家の立場から書かれている。非常に具体的で示唆に富む内容である。その中に「作品のチェックポイント」という項目が次のように示されている。

- ①「アイデアはあるか？」
- ②「芸術的か？」
- ③「読者の気持ちを考えたか？」
- ④「全力をつくしたか？」
- ⑤「起・承・転・結は？」
- ⑥「わかりやすいか？」
- ⑦「テーマは？」
- ⑧「自信はあるか？」
- ⑨「個性的か？」
- ⑩「仕上がりは？」

以上、計10項目のポイントである。

①「アイデアはあるか？」の項目は、まさにプロの作家志望者に向けて書かれたものである。出版社から刊行することが前提とされている。本稿は、プロの作家を育成することまでは目的としていないが、絵本製作の参考にはなるだろう。

②「芸術的か？」の項目では、完成した作品は全て芸術作品として見なすべきであることが示されている。絵は美術であり、お話は文学である、ということになる。これは多分に作者のプライドに関わる問題だと、作家・なかえは述べている。

③「読者の気持ちを考えたか？」の項目は、読者の対象を主に子どもと考え、子どもに対して誠実に作ったか、ということをも自分自身

で確認することを求めている。実際には自分の作りたいものを作っている訳だが、自分のことだけにこだわってしまって、本を見てくれる読者のことを忘れてはいないか、ということである。自分を大切に、読者を大切にこそ、作品は存在すると、なかえは指摘している。

④「全力をつくしたか？」の項目では、「時間がなくて」「忙しくて」「体調が悪くて」等、言い訳をしていないか、ということである。作品は残るものであり、自分の全てを懸けて作るべきものである。後悔をしないように、全力で思い残すことのない作品を作るべきだと、なかえは述べている。身につまされる項目である。

⑤「起・承・転・結は？」の項目では、お話がうまく展開しているかどうかを確かめるために、声に出して読んでみることを、なかえは勧めている。子どもに読み聞かせを行うようなつもりで、自分の作品を、他の人の作品を読む時と同じように客観的に読みながら作品をチェックしてみる。そうすると良くわかるのである。起承転結がうまくできている時は、引っかからずすらすらと自信を持って読めるものだ、と助言している。

⑥「わかりやすいか？」の項目は、内容が一人よがりになっていないか、話のつじつまが合わなかったり、難解だったりしていないか、という点をチェックする。絵や文章のわかりやすさは絵本と童話では必須である。言いたいことを、やさしくわかりやすく表現することは、非常に難しいこと

だと、なかえは指摘している。

⑦「テーマは？」の項目では、テーマがあまり表面に出過ぎてしまうと読者の拒否反応が生じてしまい、逆に控えめになり過ぎると、何を言いたいのか、わからなくなってしまふ。なかえは、作者の経験から、お話を読み終えた時に、「あっ、この本はこんなことを言っていたんだ」と気づかせるくらいが理想だと述べている。

⑧「自信はあるか？」の項目は、作品は、後で人に指摘されないように、細かいところまできちんとチェックしておくことが大切になる。文章の場合は、誤字や言葉の言い回し等の間違いがあるかどうか、等が問われてくる。これは絵も同様で、服や小道具等、その絵がお話の時代に合っているか、季節はずれの花が咲いていたりしないか、等に気を付けるのである。それらを網羅して、やっと自信を持って人の前に作品を示すことができるのである。

⑨「個性的か？」の項目では、作品にオリジナリティーがあるか、創意工夫がなされているか、が問われている。誰かの影響を受けたとしても、そこからさらに抜け出して、自分だけのオリジナリティーを目指す必要がある。

⑩「仕上がりは？」の項目では、絵本の本原稿がきれいに仕上げられているかを確認する。鉛筆の消し忘れ、汚れ等があると、その作者は作品を大切にしていないと見なされてしまう。見る前の印象も悪くなってしまふ。童話も原稿用紙に直接書く場合は丁寧に読みやすい字を書くようにする。最

近ではパソコンで文章や絵を仕上げる人が増えているが、きれいにプリントして見やすくまとめることが大切である。

このように、なかえは、プロの作家志望者に向けて、基本的な心構えとチェックポイントを明らかにしている。本稿は、プロの作家になることを目的としてはいないため、このチェックポイントの項目に全て一致する訳ではないのだが、絵本や童話を製作する際の手がかりとして、筆者も含めてぜひ参考にしたい項目だと思われる。

4 保育の手段や方法として

保育での絵本の扱い方は多様である。秋田喜代美によると、単に絵本を読んで作品の世界を楽しむことだけが目的ではなく、子どもを次の活動まで待たせておく間に読んだり、ごっこ遊びや劇遊びにつなげたり、虫に関心を持ち始めた時に園庭からすぐに手に取れる位置に出しておいたりする等、保育の手段や方法の一つとしても絵本は扱われる。砂場に行けば落ち着く子がいる一方、遊ぶ気分にはなれなくても絵本コーナーや図書室に行けば落ち着く子も存在する。年長児になると、絵本を作ってみようと促す保育者もいる。

秋田の論考からわかる通り、保育では常に揺れ動く子どもの姿に中心が置かれている。そのそれぞれの子どもたちが豊かに育つための方法の一つとして絵本は存在している。

5 美しさを感じる感性

秋田はさらに「美しさへの感性」について、「四季ある日常の暮らしの息吹を感じつつ、そ

の子らしい表現に美しさを見いだす感性が子どもの美的感覚を培っていく³⁾。」と述べている。

このように、日本における保育は現在、自然や人々など身近な環境と関わり、日々の生活の中に息づく四季などから美しさを感じ取る感性が重視されている。

保育における造形表現は、領域表現に位置付けられている。『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育保育要領』では周知のように、次の通り目標が示されている。

表現

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

このように、幼児期では特に、自分の考えたことや感じたこと、感情、体験を自分なりに表現し、充実感を味わうことが、豊かな感性や自己を表現する意欲へと繋がっていく。

6 美について考える

本来、美とは何だろうか。古来、誰もがわかるようでいて一言では言い表せないものである。学問で考えてみると、美について考える学問分野に美学がある。美学者・今道友信は次のように述べている。要約する。

美は、真や善や聖と並んで人間が古今東西を問わず常にあこがれている価値の中でも、最高の理念と考えられている。この中で聖は宗教の問題に属し、人間の立場で論ずるには限界がある。真・善・美は、古来哲学の究極理念として追求されてきた。一般には、真に対しては論理学、善に対しては倫理学、美に

対しては美学というように、それぞれ規範学を割り当てて、哲学の諸分科は成立する。「美学」という漢字の名称は、西洋近代語の aesthetics に対応する日本語訳として、明治維新前後に案出された多くの名称の中で、明治中期以後に定着した術語である。この語は、現在では、発音こそ異なるが日本のみならず中国や韓国等の漢字文化圏では一般化している。

西洋語の aesthetics は、18 世紀後半にバウムガルテン (1714-1762) がラテン語で世に送り出したのが歴史上最初である。もとをただとギリシア語のラテン語形であり、本来は「感覚的なもの」「感性学」という意味を持つ語である。日本では、aesthetics の深まりが単なる感性論を脱却してきたこと、美や芸術の重要性が 19 世紀以降になって改めて認識されてきたこと、日本における美意識の伝統の哲学的性格、の三つの理由により、「美学」と呼ばれるようになった。日本で西洋の学問に接した最初の一人である西周は、西洋近代語の aesthetics という単語には表れていない「美」という語を訳語に用いて、「審美学」としたことは、その後の日本の訳語の成立に大きな影響を与えた。このような伝統に基づいて、1899 (明治 32) 年に、東京帝国大学文学部に「美学」講座が開設され、大塚保治が初代教授に任命されることによって、日本の学会に「美学」という名称が一般化した。

こうした経緯を見てみると、美は本来的に感性と深い関わりのある概念であることが理解できる。

7 絵本と童話の造形性について考える

本章では、絵本や童話について、造形的な観点から確認した。子どもたちは、四季折々の自然や日常生活、身近な環境等から、美しさや心を動かす出来事等を感じ取っていく。感じたことや考えたことを自分なりに表現し、それを受け止める、という暖かい信頼関係が、子どもに安心感を与え、自分から表現活動を行おうとする意欲を生み出すことに繋がるのだろう。絵本や童話は、こうした伝え合う活動を促進し、強化する働きを持っている。

読み聞かせや読書活動といった絵本や童話を見て、読んで、愉しむというあり方や、文や物語、色や形、といった要素を通して表現・製作して愉しむというあり方等が、絵本や童話には存在する。どのように愉しむ場合でも、美しさを感じる感性や、心を動かされる出来事等に対する自分なりの考えや想いを大切に、それぞれの人が自分らしく、楽しく取り組むことが大切になるだろう。

IV 絵本を介した親子のふれあいについて

受賞作品である『やさしいキライなたあくんと三毛猫のミケ』、『ゆきだるまとねこのおじょうさん』は、偶然にも両作品の主人公が今までできなかったことを克服する成長ストーリーである。特徴としては、超自然的な支援者が登場することである。

『やさしいキライなたあくんと三毛猫のミケ』で登場するのは、父親がたあくんの生まれた日に連れてきた“変わった猫”(本文より)で、ほうれん草やピーマン、にんじんが嫌いで、菓子ばかりを食べているたあくんに、野菜か

ら菓子を作り、いつの間にか、たあくんが嫌いだった野菜を好きにさせてしまう。この場合のミケは、トリックスターの要素を持ち、たあくんの成長を助け、状況を一変させてしまう役割を果たしている。

『ゆきだるまとねこのおじょうさん』では、超自然的な支援者はゆきだるまということになるが、読み手の立場では、ゆきだるまとおじょうさんの両方に自己を投影することができる。道に迷って泣いていたおじょうさんが、ゆきだるまの優しさや思いやりにふれ、勇気をもって自分の家を見つけることができるとともに、ゆきだるまもおじょうさんに親切にしたことにより、ねこのお母さんから感謝の気持ちを込めた、きれいな雪と同じ色のマフラーをもらうことができる。言葉にはしていない心理描写をゆきだるまが自分の蝶ネクタイをつけた小さなねこのゆきだるまを作り、おじょうさんを励ます場面や、ねこの家に積もるきれいな色の雪、とそれと同じ色のマフラーを贈るという行動によって表現されることで、両者の心の成長をわかりやすく伝えている。

ところで保護者は子どもに絵本を与える時や、子どもと共に絵本に出会う時、どのような願いや想いがあるのだろうか。ここでは、本学の附属幼稚園の5歳児保護者に行ったアンケートをもとに絵本を介した親子の触れ合い等について述べる。

アンケートは、平成28年2月に附属幼稚園の保護者に対し任意で回答協力を得たものである。回答者数は28名だった。アンケートの内容は、質問① 親子で絵本をみる、または読み聞かせをする頻度と時間はどのくらいですか。

創作絵本を通した多面的考察

質問② 親子のふれあいやコミュニケーションで、大切にしていることは何ですか。質問③ どのような子どもになってもらいたいと思いますか。質問④ 絵本を選ぶ際に大切にしていることはどのようなことですか。質問⑤ 子どもの心を育むのに大切にされていることはどのようなことですかである。

質問④ 以外は、回答が自由記述であるため、複数の内容と考えられる回答は、複数回答としてそれぞれ1件と数えた。結果は以下の通りである。

1 結果

質問① 親子で絵本をみる、または読み聞かせをする頻度については、週に2回が8名、週に1回が6名と多く、週に30分以内の時間をかけることが多かった。(表1-1、1-2)

質問② ふれあいやコミュニケーションで大切にしていることについては、たくさん抱きしめる、スキンシップをもつが10件、子どもの話を聞くが8件、親から話しかける、会話を楽しむが7件であり、寝る前の読み聞かせは2件の回答数であった。(表2)

表1-1 1週間に親子で絵本を見る頻度

一週間の内の頻度 (回)	回答者数 (人)
0	1
1	6
2	8
3	3
4	0
5	3
6	3
7	3

表1-2 1週間に親子で絵本を見る時間

一週間に絵本を見る時間 (分)	回答者数 (人)
0	1
10	2
15	3
20	2
25	2
30	7
35	0
40	1
45	1
50	1
60	1
70	1
90	1
105	1
210	1

質問③ どのような子どもになってもらいたいかについては、他の人の気持ちを理解できる子が7件、優しい子が7件、素直な子が5件と、気質や性格にかかわる回答が多かった。(表3)

質問④ 絵本を選ぶ際に大切にしていることについては、子どもが興味を持った本や、自分(保護者自身)が幼い時に読んだ本を選ぶという回答が多数であった。(表4)

質問⑤ 子どもの心を育むのに大切にしていることについては、子どもの話を聞くことを中心に親子の喜怒哀楽の感情のやり取りや共感を大切にしていること、子どもが興味を持ったことに親子が共に取り組み体験を増やすことなどが挙げられた。(表5)

表2 ふれあい、コミュニケーションで大切にしていること

(複数回答あり)

項目	回答数
・たくさん抱きしめる、スキンシップ	10
・(幼稚園の、日中の)子どもの話を聞く	8
・親から話しかける、会話を楽しむ	7
・寝る前の毎日の読み聞かせ	2
・短い時間でも一緒に遊ぶ	2
・目を見て話をする	2
・喜怒哀楽の気持ちを表現すること	2
・親の方から声を掛ける	1
・(お互いが)楽しむこと	1
・家族でボードゲームをする	1
・子どもの気持ちになって考える	1
・テレビやゲームに子育てさせない	1
・笑うこと	1
・体験を心がける	1
・子どもの気持ちも考えて接する	1
・子どもと大人であってもルールを守る	1
・お菓子作り、お手伝い	1
・おりがみ	1

表3 どのような子どもになってもらいたいか

(複数回答あり)

項目	回答数
・他の人の気持ちを理解できる子	7
・優しい子	7
・素直な子	5
・相手のことを思われる子	4
・自分で考えて行動できる子	3
・夢や目標を見つける子	2
・友達や、周囲に優しい気持がもてる子	2
・明るい子	2
・嫌なことは「いや」と言える子	2
・想像力のある子	1
・どんな状況でも強く、たくましく、幸せと思う子	1
・困難を乗り越えられる子	1
・自分で決定し、挑戦する子	1
・自分を持っている子	1
・自分の意見を言える子	1
・一人で問題解決できる子	1
・なんでも一生懸命できる子	1
・人に迷惑をかけない、心も体も元気な子	1
・子どもらしい子	1
・心が自由な子	1
・自立した子	1
・挨拶を自分からできる子	1
・人の良いところを見つけられる子	1

表4 絵本を選ぶ際に大切にしていることについて

(複数回答あり)

選択理由	回答数
子どもが興味を持った本	22
自分が幼い時に読んだ本	17
誰かに紹介された本	5
キャラクターがあり、シリーズ化されている本	3
その他	9

表5 子どもの心を育むために大切にしていること

(複数回答あり)

項目	回答数
・子どもの話を聞く	4
・興味を持ったことを体験させる	3
・何かを一緒にする時間	2
・絵本を読み聞かせる	2
・喜怒哀楽を共有する	2
・頑張ったら褒める	2
・スキンシップ、だきしめる	2
・子どものことを大好きだと伝える	1
・気持ちを伝えることは大切だと伝える	1
・友達とのふれあい	1
・いろいろな絵本とふれあう	1
・共感	1
・生き物の世話	1
・想像する力を育むように話を進める	1
・「弱くてもよい」「泣いてもよい」から立ち上がれることが大切と伝えている	1
・話しかけを多くする	1
・子どもが自然に育つことを信じ、親が捻じ曲げないようにする	1
・親の心を安定させる	1
・子どもにとって「楽しい」と思うことを優先する	1
・旅行、キャンプ	1
・いろいろな人とふれあうこと	1
・自然にふれる	1

2 考察

(1) 読み聞かせと関係性の育み

アンケートの結果から、対象児は、週に1、2回30分以内のペースで読み聞かせの時間を持つということが明らかになった。高橋(1991)によれば、親子間の読み聞かせの際の相互反応は、読み聞かせの機会が増すごとに親から子どもへの一方的な働きかけは減少し、子どもから親への働きかけは増加するという。つまり、絵本を読み聞かせる機会が増えれば、親が子どもに話題を投げかけて理解をさせようとしなくても子どもから能動的に親に働きかけができるのだ。

これは、絵本の読み聞かせという安全な枠組みの中で、少しだけ母親が母親の役割を置き、遊び心や冒険心など普段は忘れがちな子ども心を持ち、素の自分になれるということであろう。松瀬(2013)によれば、大人が絵本を読むということは、自分探しや自己探求に密接につながっているという。親子での読み聞かせは、その特別な時間の積み重ねが大切であり、週に1、2回ずつということが好ましいペースなのかは、今回は判断できない、しかし継続をしていくことを考慮に入れると、可能なペースであると思われる。

(2) 子どもの心を育むための三項関係

子どもの心を育むために大切にしていること、に対する回答では、子どもの話を聞くこと、興味をもったことを体験させること、何かを一緒にする時間を持つこと、絵本を読み聞かせることなどが挙げられたが、これは、何かの媒介をめぐる親子の三項関係の構図と言え

るのではないだろうか。つまり、幼稚園での出来事を介した親子の気持ちの共有であったり、興味を持ったことを介した体験の共有だったり、何かを介した親の想いと子どもの想いの情緒的交流がそこにある。勿論、北山(2005)が述べるように、情緒的交流と、身体的交流の二重の交流がより一層の絆を深めるということから、スキンシップが挙げられていることも理解できよう。絵本は、親と子の関係を育む媒介物そのものなのだ。

三項関係は、親が絵本に対する子どもへ橋渡しの役割だけにとどまらない。切り口を変えると、作者が作品に注いだ想いと、親の子どもに対する願いや想いが存在する。表3に示された、人の気持ちを理解できる子、優しい子などがそれである。その中心に子どもの絵本を通じて得た疑似体験や親子のふれあいの中で感じる実際の体験が一端としてあるのではないだろうか。

V おわりに

本プロジェクトによって、多面的な分野から童話や絵本について改めて見つめ直すことができた。製作した作品を通じ、子どもたちに暖かい気持ちを届けることができ、達成感と嬉しさを感じている。

関係者の皆様には、心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 金田一春彦『日本語 新版(下)』岩波書店 1988
- 2) 中川素子『絵本は小さな美術館 形と色を楽しむ絵本 47』平凡社、2003、p.22

- 3) 秋田喜代美『保育の温もり ～続保育の心もち～』ひかりのくに、2014、p.16～p.17
- 訳『かいじゅうたちのいるところ』富山房、1975

- 15) 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成20年10月』フレーベル館、2008

参考文献、資料

- 1) 秋田喜代美『保育の温もり』前掲書
- 2) 今道友信／編集『講座 美学1 美学の歴史』東京大学出版会、1984
- 3) 北山修『共視論 母子像の心理学 講談社選書メチエ』2005
- 4) 厚生労働省『保育所保育指針解説書 平成20年』フレーベル館、2008
- 5) 高橋久子「親・子ども・子どもの本」福沢周亮（編）子どもと本の心理学 大日本図書 1991
- 6) 田上貞一郎・高荒 正子『新訂 保育内容指導法「言葉」』萌文書林、2016
- 7) デイック・ブルーナ／文・絵、石井桃子／訳『ちいさなうさこちゃん』福音館書店、1964
- 8) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説 平成27年2月』フレーベル館、2015
- 9) なかえよしを／作、上野紀子／絵『ねずみくんのチョッキ』ポプラ社、1974
- 10) なかえよしを／作、上野紀子＋奥谷敏彦／絵『絵本と童話の作り方』長崎出版、2007
- 11) 中川素子『絵本は小さな美術館』前掲書
- 12) 藤本朝巳『子どもと絵本 絵本のしくみと楽しみ方』人文書院、2015
- 13) 松瀬喜治、松瀬留美子 絵本に学ぶ臨床心理学序説 ナカニシヤ出版 2013
- 14) モーリス・センダック／著、神宮輝夫／